

祝祭日には国旗を掲揚しましょう

敬神尊皇 黎

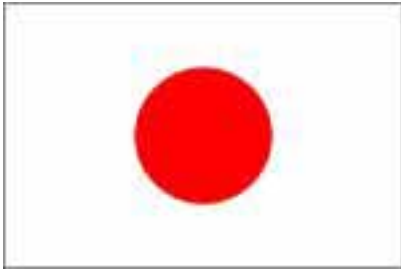


明報恩感謝

監修/日刊ひぐらし 〒151-0071東京都渋谷区本町1-30-18-107 <http://www.higurashi.net/> 第0016号  
護國青年會議 <http://www.gokoku.net/> 発行人/山本修三 編集人/戸出蒼流 平成17年8月25日

## 益荒男の本懐、60年目の夏

編集人/戸出蒼流



皇紀2665年8月15日午前10時40分、地下鉄を降りて地上に出ると真夏の太陽と大勢の機動隊が出迎えてくれた。昨年と一昨年は、御英霊の涙雨が滂沱として流れる「慟哭の靖国」であったが、今年は御英霊の怒りが灼熱となって表れ「烈火の靖国」であった。60年前の今日、昭和天皇自らのお言葉により国民は日本の敗戦を知った。涙が流れて流れて流れ尽きた時、人々は遙かに遠い復興への道程を歩み始めた。息子や娘を失った人々が、父や母を失った子どもたちが、力を合わせて焦土と化した祖国の復興に心血を注いだ。その結果、我が日本は驚異的な速さで復興を遂げ今日の平和と繁栄を得たのである。絶望の間に彷徨う国民に生きる望みと明日への活力を与えたのは何か・・・それは、国家存亡の危機に一命を捧げられた靖国に祀られている246万6千余の御柱の存在である。わけても先の大戦で、國を護り、故郷を護り、家族を護る為に、南の海で北の大地で華と散った213万3千余柱の御英霊の存在に他ならない。

11時に本隊と合流し車輦内で心尽くしの昼食を有り難く頂戴した後、参道へと歩を進めた。参道で目に飛び込んできた光景は「美しい日本人の心」そのものだった。我が同胞は、支那人や朝鮮人のように投石をしたり、他国の国旗に火をつけたりする醜行をすることもなく、ただ只管に拝殿を目指していた。黙々と歩く老若男女の人の群れは、支那や朝鮮或いは国内の左巻き売国勢力に対する痛烈な批判と挑戦状を叩きつけているかのようであった。肅々と歩く彼等の姿は、犬猫国家の愚民による反日デモとの相違を鮮明にし、かつて御英霊の方々が示されたのと同様に、日本人の尊厳と魂を世界に知らしめたといえるのではなからうか。

人波に翻弄されながらもどうにか神門の前まで辿り着くと、何やら訴え掛けている年配の紳士淑女のグループがいた。「終戦から60年経ちましたが、私たちは命ある限り靖国神社に訪れ、英霊の皆様へ感謝と哀悼の誠を捧げます。」と言った後「海行かば」を歌い始めた。「・・・大君の辺にこそ死なめ かえりみはせじ」この歌には、現代の日本人が喪失した日本人の精魂と『益荒男の本懐』を成し遂げた大和武士の潔さと清々しさが滲み出ている。私がこの歌こそ靖国参拝に最も相応しい歌であると思う所以である。神門に入る時、身動きできないような大混雑にも拘らず立ち止まって一礼する我々の姿を見て真似をする若者がいたが、これも啓蒙活動の一環なのかと妙に納得してしまった。

それにしても物凄い人出である。あとから聞いた話によると、この日靖国を訪れた人は、20万5千人を超えたという。「ひと目御英霊にお会いしたい、一言御英霊に感謝を申し述べたい。」その一心で拝殿に向かう長蛇の列は、遅々として進まない。汗は額を流れ落ち、それを拭うハンカチは既に用を足さなくなっているが、先達に思いを馳せれば暑いなどとは言ってはられない。すぐ近くには猛暑の中、杖をついて列に加わる老夫婦がいた。その老夫婦を守るかのように10代・20代の若者の姿が目立った。この場にいる誰もが内閣総理大臣・小泉純一郎がやって来るのを信じて待っていた。首相は、8月15日に靖国神社に参拝することを公約として掲げておきながら、御英霊と我々を4回も騙し続けてきた。支那や朝鮮や全世界が注視する60年という節目の年を迎えたこの日は、首相が人間の心を取り戻す最後の機会であった。しかし首相は来なかった。我々がネズミから人間へと呼称を変える最後の機会を首相は自ら放棄したのである。コネズミは拉致被害者を政局に利用したように御英霊を政治利用したのである。この日の酷暑は、5回もコネズミに裏切られ続けた御英霊の烈火の怒りによるものに違いない。



例年通り拝殿右横に整列し、正午の時報を合図に1分間の黙禱を捧げる。それまでの喧騒が嘘のように静寂が辺りを支配する。聞こえてくるのは蝉時雨と遠くで飛ぶヘリコプターの音だけである。「御英霊の皆様、こんな國にしてしまった責任の一端は私たちにあります。お詫びして済むものとは思いませんが、どうかどうかお許しください。護國の一心で斃れたもうた皆様方には計り知れない御恩があり、いくら感謝しても感謝しきれないものがあります。心から感謝と哀悼の誠を捧げます」頭を垂れて御霊の鎮魂を祈念すると汗とは異なる液体が頬を流れた。「皇尊いやさか、皇尊いやさか、皇尊いやさか」心の中で三度叫んだ。大東亜の敗戦から60年目の夏の日のことだった。

例年通り拝殿右横に整列し、正午の時報を合図に1分間の黙禱を捧げる。それまでの喧騒が嘘のように静寂が辺りを支配する。聞こえてくるのは蝉時雨と遠くで飛ぶヘリコプターの音だけである。「御英霊の皆様、こんな國にしてしまった責任の一端は私たちにあります。お詫びして済むものとは思いませんが、どうかどうかお許しください。護國の一心で斃れたもうた皆様方には計り知れない御恩があり、いくら感謝しても感謝しきれないものがあります。心から感謝と哀悼の誠を捧げます」頭を垂れて御霊の鎮魂を祈念すると汗とは異なる液体が頬を流れた。「皇尊いやさか、皇尊いやさか、皇尊いやさか」心の中で三度叫んだ。大東亜の敗戦から60年目の夏の日のことだった。